

特集：「自己調整学習・自由進度学習」の展望
「自学・自習」において「子供がする授業」への試錯的改善
—N小学校において実践に取り組む上で直面した課題や大切にしたこと—

小 幡 肇（文教大学教育学部）

大 谷 敦 司（東北文教大学人間科学部）

Improvement of Classes through Trial and Error to Realize ‘Child-Oriented Classes’ for ‘Self-Directed Study’
— Challenges and Important Considerations found during this Process at N Elementary School —

OBATA HAJIME, OHYA ATSUSHI

(Faculty of Education, Bunkyo University)

(Human Sciences, Tohoku Bunkyo University)

要 旨

N小学校における一人一人の子供を主語にする授業を目ざす取り組みとして、T小学校で行っていた「自学・自習」を単元計画の一部に導入し、「子供がする授業」への試錯的改善に取り組んだ。そこから、将来的には「自学・自習」における「子供がする授業」を基盤として、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現を目ざすことにした。

結果、子供と教師の変容を手がかりとして、「子供がする授業」のへ試錯的改善において、実践に取り組む上で直面した課題や大切にすることを明らかにすることができた。また、取り組んだ結果、生まれた子供の声・教師の声をもとに、「自学・自習」における「子供がする授業」が、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなるということを得ることができた。

今後、「自学・自習」（子供がする授業）が基盤となり、単元内自由進度学習等、教師が直接指導をしない授業の在り方や意義・価値、こうした学習に取り組む単元やカリキュラムの作り方の変化、等の研究に取り組んでいく必要があると考える。

キーワード：子供がする授業、自学・自習、子供の変容、教師の子供観・授業観の変容

1. はじめに

今日、一人一人の子供を主語にする学校教育¹⁾の実現が目ざされている。そして、それは、一人一人の子供を主語にする授業の実現を目ざしていると言い換えることができる。

しかし、これまでの授業は「教師が授業をする」ことが前提であり、学校教育の主要なアクターである教師に着目する²⁾傾向が

ある。

そこに留まっている以上、教師を主語にする、従来の授業から脱却できないと言えよう。

そこで、筆者（大谷）は、以前勤務していたT小学校³⁾において、一人一人の子供を主語にする授業の実現を目ざす取り組みとして、「教師が授業をする」から「子供がする授業」への試錯的改善に取り組んだ⁴⁾。

そして、「子供がする授業」を基盤として、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた、「自学・自習」・MP（マイプラン）学習・FSP（フリースタイルプロジェクト）を実施した。

その後、筆者（大谷）は、一人一人の子供を主語にする授業の実現を目ざすA校長（N小学校）の求めで、N小学校の研究アドバイザーになった。そして、一人一人の子供を主語にする授業を目ざす取り組みとして、T小学校で行っていた「自学・自習」を単元計画の一部に導入し、「子供がする授業」への試錯的改善に取り組んだ。

さらに、将来的には「自学・自習」における「子供がする授業」を基盤として、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現を目ざすことにした。

そこで、本研究は、まず「自学・自習」を単元計画の一部に取り入れ、「子供がする授業」への試錯的改善に取り組むことを通して、子供と教師にどのような変容が見られたかを、子供へのアンケートや教師へのインタビューから探る。

次に、子供へのアンケートや教師へのインタビューの結果を手がかりとして、「子供がする授業」への試錯的改善において、実践に取り組む上で直面した課題や大切にすることを明らかにする。そして、取り組んだ結果、生まれた子供の声・教師の声をもとに、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりについて考察する。

2. 子供がする授業とその導入過程

N小学校における授業は、「教師がする授業」の構造であった。そのため、子供の授業への関りは、教師の発問・指示に応じて応答するといった、受動的な姿だった。

そこで、PHASE①として、「教師がする授業」を続ける限り、子供が受け身であることに変わりがないということを共有することか

ら始めた。

また、一学期最後の研究授業後、一人一人の子供を主語にする授業と言われる以前から、「授業は子供が主役、子供のための授業」が大切と言われてきたということを確認した。そして、そのためには教師の子供観・授業観が変わらなければならないということを共通理解した。

その後、PHASE②として、「授業は子供が主役、子供のための授業」という授業観に基づき、一人一人の子供を主語にする授業、つまり「子供がする授業」への試錯的改善を提案した。そして、具体的な方策として、T小学校で行っていた「自学・自習（自分たちだけで授業を進めること、名称は6年生が決定）」を示した。

「自学・自習」では、子供が教師役となり、授業が進行し、板書も子供が行う。つまり、自分たちだけで授業を進める「子供がする授業」を行うことになるのである。

さらに「子供がする授業」を通して、子供の学ぶ姿に変容が見られれば、その事実に基づいて、教師の子供観・授業観が変わるということを説いた。

その後、PHASE③として、夏季休業中に研究部の賛同を得て、「自学・自習」の校内研修会（概要は下欄）をもち、「自学・自習」の概要と実施にあたっての留意点等を研修し、質疑応答を行った。

【「自学・自習」についての研修会の概要とその他の留意点】

- 教師役と板書役の数名の子供たちがいわゆる普通の授業を進める。
- 全学年・全学級で取り組む。
- 全授業を対象とするが、担任ができそうだった教科等から始める。
- 実施する回数は特に定めない。
- 授業を行うに当たっては、教師役と板書役の子供たちと事前に打ち合わせを行う。その際は、学習指導要領・解説、教科書、指導書（赤刷り）、活用できる教材などを提示する。
- 自学・自習の授業の後は、授業の進め方などについて教師も入って振り返りを行う。
- 基本的には45分の授業とするが、低学年は無理をせず30分・15分等の区切りで授業を進めることも考える。

質疑の中では、これまでに経験がないことを実施するのは難しいのではないかと懸念が出された。それに対して、筆者（大谷）は「T小学校で実施した際も当初同じような懸念はあったが、取り組んでみれば一回目から予想以上にできるものだった。それは、子供は教師の授業を日々受けていることでモデルをもっているためと考えられた」という体験談を述べた。あわせて、「回数を重ねてくると『自学・自習』の質が高まり、高学年のあるクラスでは子供から『自分たちでやった方がうまくいく』と言われた教師すらいて、子供の伸びを頼もしく思ったという話も付け加えた。（下線、筆者（小幡）、以下同様）

この構造の授業は、以前から学級会では行われてきた。しかし、司会役の子供の横に教師が陣取り、必要な際の指導・助言によって司会役が操り人形のような状況となっていた。

そのような状況は、子供が主役・子供同士の学び合いとは言い難いため、T小学校でも授業中の教師による介入は原則として行っていないことなども説明した。

二学期開始後、各学級で一度は取り組むこととし、8月下旬に低・中・高学年から一学級以上が実践を公開し、それに基づいた研修会を実施した。また、各学年・学級の実態や単元計画に基づいて、「自学・自習」に取り組んだ。その際、N小学校においても、「子供がする授業」について独自の名称を決めることにした。結果、子供が話し合い、T小学校と同じ「自学・自習」に決まった。

【N小学校6年、1回目の自学・自習2023年】



3. 調査とその結果

本研究では、「自学・自習（子供がする授業）」について、子供へのアンケートと教師へのインタビューを行った。

(1) 子供へのアンケート（全校児童2024年2月上旬）

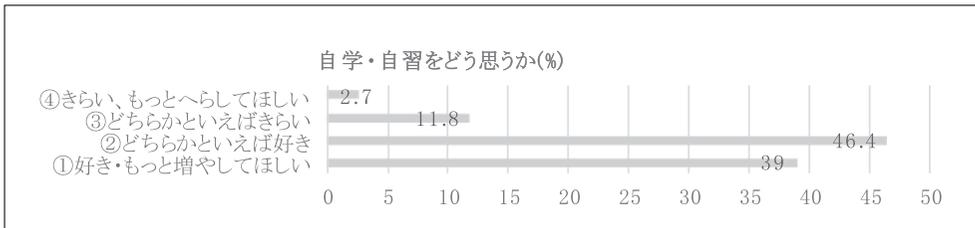
① 調査内容

以下の内容について、学年の発達段階に応じて、質問紙を使用し、教師が項目を読み上げて挙手で人数を把握するなどして学級毎に調査を行った。

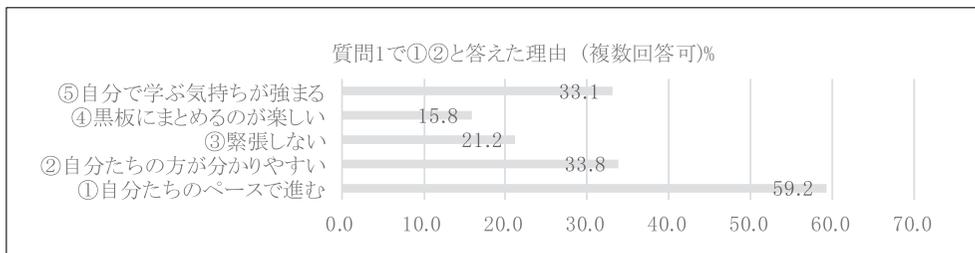
1. 「自学・自習」（自分たちだけで授業を進めること）をどう思っていますか。
 - ①好き・楽しい、もっとふやしてほしい
 - ②どちらかといえば好き・楽しい、もう少しふやしてほしい
 - ③どちらかといえばきらい・つらい、もう少しへらしてほしい
 - ④きらい・つらい、もっとへらしてほしい
2. 1で①②を選んだ人だけ教えてください。それはどうしてですか（いくつでも）。
 - ①自分たちのペースで進むことができるから。
 - ②自分たちで学習すると分かりやすいから。
 - ③発表するときにきんちょうしないから。
 - ④黒板にまとめるのが楽しいから。
 - ⑤自分で学ぶ気持ちが強くなるから。
 - ⑥その他（ ）
3. 1で③④を選んだ人だけ教えてください。それはどうしてですか（いくつでも）。
 - ①先生が進めてくれる方が楽しいから。
 - ②先生から教えてもらう方が分かるから。
 - ③発表しても聞いてもらえないから。
 - ④黒板にまとめるのが難しいから。
 - ⑤自分で学ぶのがたいへんだから。
 - ⑥その他（ ）
4. 自学・自習をしたことで、ふだんの授業がこれまでとくらべて変わりましたか。
 - ①とても変わった
 - ②少し変わった
 - ③あまり変わらない
 - ④全く変わらない
5. 4で①②を選んだ人だけ教えてください。それはどうしてですか（いくつでも）。
 - ①先生に頼らず、自分たちだけでも授業ができるようになったから。
 - ②発表するときにきんちょうしなくなったから。
 - ③黒板などを使って、みんなに説明することに自信がついたから。
 - ④他の人の発表を聞くことの大切さが分かったから。
 - ⑤他の人の発表につなげて話そうとする気持ちが強まったから。
 - ⑥その他（ ）

②アンケートの結果(回収 364/370 名、回答率 98.4%)

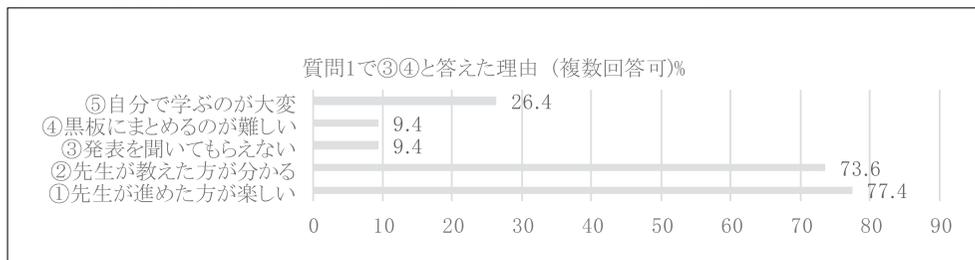
質問1. 「自学・自習」(自分たちだけで授業を進めること)をどう思っていますか。



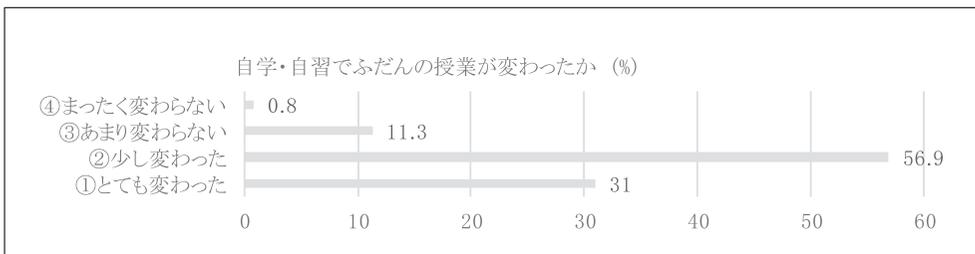
質問2. 1で①②を選んだ人だけ教えてください。それはどうしてですか(いくつでも)。



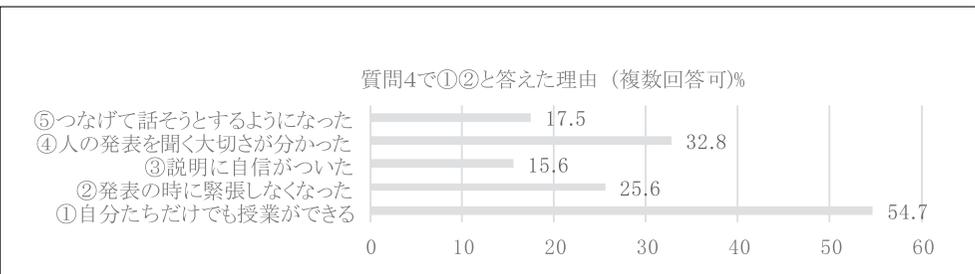
質問3. 1で③④を選んだ人だけ教えてください。それはどうしてですか(いくつでも)。



質問4. 自学・自習をしたことで、ふだんの授業がこれまでとくらべて変わりましたか。



質問5. 自学・自習をしたことで、ふだんの授業がこれまでとくらべて変わりましたか。



(2) 教師へのインタビュー（2024年2月上旬）

低・中・高の各学年から1名ずつ選出し、インタビューを行った。質問内容と教師へのインタビュー内容は、以下の通りである。

① 調査内容

1. 自学・自習を導入しようとしたとき、正直なところ、どう思っていましたか。
2. 初めての自学・自習の授業について伺います。
 - ① 終わった時、どんな感想をもちましたか。
 - ② 子供たちはどんな感想をもっていましたか。
◇ 先生の役割の子供たち
◇ それ以外の子供たち
 - ③ 二回目以降に向けて、どんなことを改善したいと思っていましたか。
3. 現時点で、自学・自習について感じていることを伺います。
◇ 何回くらい実施しましたか。
◇ 現時点で、どんな感想をもっていますか。
4. これからも、自学・自習を取り入れていきたいと思いませんか。
それは、なぜですか。
4. 自学・自習に取り組んで、普段の授業に変化がありましたか。あったとすれば、どんなことが変わったと感じていますか。

② インタビューの結果

a) 取り組むことが決まったことについて

〈低学年の教師〉

やったことがなかったので、できるのかなと思いました。イメージも持てていなかったです。学級会は子供にしてもらっていたので、それが教科に変わるだけかなと思っていました。だから、やることに抵抗はなかったです。

〈中学年の教師〉

去年、算数で一度やったことはあり、発言が増えたというのはあったのですが、本当にできるのかなと思ったのが正直なところでした。話が変な方向に行くんじゃないか、内容理解が浅くなるんじゃないかという不安がありました。もう一度復習しなければならなくなって結局は時間がかかるんじゃないかと。

〈高学年の教師〉

去年、一回やったことがあり、先生役の子

供も楽しそうだったので、自分の学級の子ならできるかなと前向きに考えていました。

b) 初めての「自学・自習」について

【総括】

〈低学年の教師〉

一回目なので型をイメージしすぎていて、電子黒板に次はこうするという流れを出して、先生役の子供が迷わないようにしました。そのため、型通りの授業になり、これでよかったんだろうかと思いました。やってみて、よくわからなくなりました。

〈中学年の教師〉

案外できるなと思いました。先生役の子が自分の考えをもっと押し付けると思っていたのですが、一人一人の子供の話をよく聞いていました。手を挙げた人の話だけじゃなくて、手を挙げていない子たちにも「どうですか」と聞いていた。みんなにバランスよくフェアに上手く聞いていて、すごいなと思いました。

〈高学年の教師〉

うまくいかなかったです。教師役が男子5人だったのですが、誰が主なのかあまいで、だらだらとした時間が流れてしまいました。授業の流れなどの打ち合わせはしていたのですがうまく進まなかったなど。

【教師役の子供】

〈低学年の教師〉

とても楽しかったと言っていました。先生がやっていたことを自分たちが進めていいというのは嬉しかったようです。楽しかった、次はいつやるのと言っていたのが印象的でした。失敗したというような声はなかったです。

〈中学年の教師〉

他の人の話を聞いたり板書したりするのが楽しかったそうで、板書を喜んでいました。

〈高学年の教師〉

5人のうち3人は、もうやりたくないと言っていました。残り二人は、ちょっと悔しいからまたやりたいと言っていました。そして、4人は後でもう一回先生役をやりました。二

人ずつ組んだのでうまく行って満足気でした。

【フロア側の子供】

〈低学年の教師〉

勉強が分かったのかということについては、私はまだ理解していないだろうと思って見ていたのですが、子供は分かった、おもしろかったと言っていました。そして、次は私が先生役をやりたいという子がたくさんいました。

〈中学年の教師〉

自分の話ができたという子が多かったです。

〈高学年の教師〉

にこにこして授業を受けていて、先生役の子を助けてあげようという様子が見られました。楽しかったと言ってる子が多かったです。

【二回目以降に向けて】

〈低学年の教師〉

型にはめないほうがいいと聞いたような気がして、やり方を変えないといけないとっていました。それで、型を消して、どう進めていくかを子供と相談するようにしました。

〈中学年の教師〉

振り返りをしっかりした方がいいのかなと思いました。一回目が学級会だったので自分たちで話し合っただけで決めた活動が本当に楽しかったかという振り返りです。話し合いが妥当だったのかということ。きちんと考えずにただ話し合っただけだから、実際にやってみると決めた時間を守れなかったり喧嘩になったりしたんじゃないかと考えてほしかったです。

〈高学年の教師〉

教材研究をしないとだめだと思いました。教師側の内容研究が甘かったので打ち合わせがうまくいかなかったと反省しました。教師役の子供の拡大図の描き方が、学習を滞らせたと言われました。

c) 現時点

〈低学年の教師〉

12回か13回は取り組んできました。先生役が特に自信をつけることが分かってきました。それを生かして次の活動でも、自分の意見を

堂々という姿が見られました。あの子ができたのなら私もやってみたい、という前向きな意見が多く聞かれるようになりました。次はいつやるんですかとか、次の箱の勉強の時は僕が（先生役を）やりたいんですけどいつから始まりますか、等と言う子供が増えて、取り組んでよかったですなと思っています。自分から意欲的に次のことに取り組みたい、自分も前に出てやってみたいという姿が見られ、すごいなと思っています。学級会でもやってきたんですけど、学級会の時と違うのは、また（学級会の先生役をやってみたい）とは言わなかったなということです。

〈中学年の教師〉

20回くらい取り組んできました。子供がいろいろなことを回すのが上手になった。決めたからこの時間で、というのではなく、あとのくらいの時間が必要だと自然に声が出て取り組んでいます。そして、子供だけで、授業時間の中で「今日の授業はどうでしたか」という振り返りまでできるようになっています。授業中にできない時は少し時間をください、と言ったときもあります。先生役をした子供からは「もう一回やらせてください」と言われることが多いです。「次の時間も自学・自習じゃだめですか」とか「社会も自分たちでできます」なんて言ってきます。授業をしていても、「ここからは自学・自習じゃだめですか」と聞かれることもあります。「ちょっと待ってね…」と答えることになりそうです。任せるには準備をしなければならないですから。中間休みや昼休みの両方が必要なこともあるし、どちらか一つで足りることもある。だから、今日やらせてください、と言われても「どうぞ」とは言えないです。子供はそれも分かっているのに「やれる」と言っているようです。楽しいしもっとやりたいと思っています。

〈高学年の教師〉

7～8回くらい取り組んできました。教科

や単元によって、取り組みやすいものと取り組みにくいものがあると思っています。例えば、道徳は子供と一緒に授業づくりがしやすいと考えています。逆に、算数は難しいです。算数は単元なので、導入ではなく途中で「自学・自習」を入れたいなと思っています。「自学・自習」は打ち合わせが必要なので、事前に時間をとって子供と授業づくりをします。ところが、いざやろうとするときは、前時までの授業が予定通りに流れているとは限らないので、打ち合わせ通りの授業となるのは難しいです。打ち合わせには一時間くらいかかるんですが、流れのちょっとしたずれを先生役の子供だけで調整するのは大変です。その点、道徳は一時間毎の場合が多いので、打ち合わせが生きてきます。子供は、「自学・自習」が楽しいと思っています。先生役は固定化してきているんですが、授業もうまくなっていて、この前は「先生より上手だ」と言われました。

d) 今後

〈低学年の教師〉

これからもやってみたいですね。総合的な底上げというか、教師が話した時の反応より、子供が話したほうが一人一人が素直に話すなと感じています。私が喋ると、シーンとなる時があります。求められていることを答えなければいけない、なんて察するところがあるのかもしれません。授業の中で差し水のようなことがあります。こっちが話し出すと、せっかくここまで話し合ってきたのに結局はそっちに引っ張りたいたいでしょ、みたいな一瞬の空気を感じることがあります。こっちが最後まで出ないほうが「Y君たちが凄かった。私もやってみたい」のような感想をもって、次の勉強への意欲や友達同士の人間関係にもつながると感じています。友達同士を認め合うので、学級づくりになると考えています。

〈中学年の教師〉

これからも取り組みたいと思っています。

単元全部は難しいですが、単元の中でポイントを絞ってやりたいです。算数でいうと、ある程度の解き方は一斉でやって、これまでたし算だったところを引き算にすればいいというようなことは子供だけでもやれるので、そういうところは任せていいんじゃないかと。かけ算の筆算が二桁から三桁になるなどというところは子供だけでできます。というところも任せたいと思っています。教科書の「確かめよう」とか練習問題は、子供でやった方がいい。子供同士で取り組んだ方が、「これどうするの」などの教え合いが多くなる。気軽に聞きやすいようです。それでも分からない場合は私のところに聞きに来てくれます。

〈高学年の教師〉

これからも取り組んでいきたいと思っています。

e) 普段の授業への影響

〈低学年の教師〉

教師役の子供が一番変化して、手を挙げて進んで発表しようとする姿勢がはっきり見えました。先生役が終わった後の変化が一番大きいのですが、その後もその姿勢は続きます。加えて、相手意識をもって喋っていることがよくわかりました。先日の授業参観の時も、教師役をした子供は、友達が話していることの意図を汲んで「こういうことだよね」と反応していて、優しく受け入れることができるようになったと感じました。グループ作りの時も「こっちにおいでよ」と自然にやさしく受け入れられる姿が増えたなと喜んでます。

〈中学年の教師〉

子供が話すようになりました。同調圧力が弱まったというか、教師に気を遣わずに喋るようになりました。構えずに話すようになってます。以前とは全く違います。それに、学習への取り組みが意欲的になりました。授業中にぼんやりしている子が減って、自然にみんな集中しているようになりました。

〈高学年の教師〉

学習指導要領が、子供にとって身近な存在

になりました。教室に置いてあって、教師役の子供が授業づくりの時にも見るんですが、それ以外でも見ている子が増えています。「どこをやるんですか」「ここにこう書いてあるからやるんだな」とか「こういう力がつけばいいんだな」と確認するようになってきました。国語の書く力の授業だったら、子供が「これいいんじゃない」などと資質・能力を選んでから内容、つまり教科書を使うという感じになってきました。国語はこんなふうにやりやすいなと思っていますが、算数はどうしても内容確認になってしまって、難しいです。

4. 結果の分析と考察

以下、子供と教師の変容を手がかりとして、「子供がする授業」への試行的改善において、実践に取り組む上で直面した課題や大切にしたいことを明らかにする。そして、取り組んだ結果、生まれた子供の声・教師の声をもとに、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりについて考察する。

4-1. 初めての「子供がする授業」に対する課題・懸念と取り組み後の反省点

初めて「自学・自習」において「子供がする授業」に取り組む前後、教師には、次のような課題・懸念や反省点が生じている。

取り組む前には、やったことがないのでできるのか、イメージを持ってない等の課題が生じている。また、「子供がする授業」では、話が変な方向に行くのではないかと、内容理解が浅くなるのではないかと、復習が必要となり時間がかかるのではないかと懸念が生じている。

さらに、一回取り組んでみた結果、型をイメージしすぎた、流れを出して子供が迷わないようにした、授業の流れなどの打ち合わせはしていたがうまくいかなかった、誰が主なのかあいまいで、だらだらとした時間となっ

たといった反省点が生じていることが分かる。

以上のような課題・懸念・反省点は、2回以降の「子供がする授業」への試行的改善の課題となったと考える。

4-2. 子供の変容

N小学校の子供へのアンケートでは、「どちらかといえば」を含めれば、85%を超える子供が、「自学・自習」（自分たちだけで授業を進めること）が好き・楽しい・もっと増やしてほしいと答えている。その理由に着目すると、約60%の子供が、「自学・自習」（自分たちだけで授業を進めること）について、「自分たちのペースで進むことができる」、「自分たちで学習すると分かりやすい」、「自分で学ぶ気持ちが強くなる」という成果を得ている。

教師へのインタビューでも、低学年の教師から、教師役の子供が「次の時は自分が先生役をやりたいが、いつから始まるのか」と尋ねてくるという話があった。

これは、子供が自分たちだけでも授業を進めることができるという手応えをもってきており、それによって学習への意欲が高まり、人間関係が良好になったと考える。

中学年の教師からは、子供同士で学び合った方が素直に話することができるという話があった。高学年の教師は、「授業がうまくなって、『先生より上手だ』と言われた」、「先生役の子を助けてあげようという様子が見られました」と述べている。

これは、同調圧力が弱まり、教師に気を遣わずに話せるようになったことであり、自分たちで自分たちに合ったペースで進む授業に充実感を感じ、それによって教師との信頼関係が高まっていることを示していると考えられる。

今回の子供へのアンケート内容は、T小学校が「自学・自習」を導入した年度末に行ったもの（2020年2月実施。対象は3年以上の全児童）に準じている。その際のT小学校の集

計結果は、「自学・自習」が「好き・楽しい・もっと増やしてほしい」は「どちらかといえば」を含めて72%であった。その理由は割合の多い順に「自分たちが思っているペースで進むことができるから」、「自分がやらなければならないという気持ちが強くなるから」、「自分たちで学習した方がわかりやすいから」であり、N小学校と同様の結果であった。

つまり、ここまで述べてきた子供の変容は、「自学・自習」において「子供がする授業」に取り組んできたことによると考えることができる。

4-3. 「子供がする授業」による成果

第一点、これまでN小学校では、教師による一斉授業では、進む速さや活動に費やす時間に子供の求めとずれが生じやすいということが話し合われてきた。しかし、「自学・自習」において取り組んだ「子供がする授業」では、授業の進む速さや活動に費やす時間が子供の求めに応じたものとなったという成果を得ることができたという声が高まった。

第二点、高学年の教師から「学習指導要領が子供にとって身近な存在になった」という話が出され、子供が学習指導要領や教科書等と学ぶ内容や学習活動とのかかわりを自ら関連付けられるようになったとしている。これは、「自学・自習」に向けて、教師と子供が事前の打ち合わせ・教材研究を積み重ねてきた成果だと考える。そして、子供は、授業の主導権を委ねられたことにより、授業を行うことに意欲的に取り組もうとし、自分たちで学んだことを授業として実現していく充実感を得ていると考える。

第三点、子供は「自学・自習」における「子供がする授業」のよさについて、「自分たちのペースで進める」ことができることをあげてている。これは、「子供がする授業」では、「教師の指導という枠組みが薄まり、子

供が互いの求めを確認しながら、互いの求めを大切にして授業を適切に進めていこうとする意識が強まっていると言えよう。

第四点、この「自分(たち)のペース」で学ぶことができるということが基盤となって、今後、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現を可能としていくと考える。

4-4. 実践に取り組む上で直面した課題や大切にしたこと

取り組む上で直面した課題である。

第一点、中学年の教師が「自学・自習は単元の中でポイントを絞って取り入れたい」「子供同士で学んだ方が教え合いは盛んになる」と語ったり、高学年の教師が「教科や単元によって取り組みやすいものと取り組みにくいものがある」と語ったりしたことから、教材研究の不十分さやカリキュラムマネジメントへの課題への着目が高まっていると考える。

第二点、いずれの教師も「自学・自習」に向けた子供との打ち合わせが大切だと述べている。教師が授業を直接進められない学習だからこそ、子供と教師が一緒になって教材研究を行うことや「自学・自習」に向けた子供との打ち合わせ等への課題を自覚したと考える。

取り組む上で大切にすることは、いずれの教師も、子供観の転換を大切にしたということである。これまでは、子供だけで授業を進めることはできない、できるにしても内容が乏しくなる、教師役ができるのは特定の一握りの子供である、等と考えてきたことが覆されたと話している。そして、躓かないように型を示していたが、それが足かせになっていくことに気付き、子供と相談をしたことで、自信をもって授業を進めることができるようになり、取り組みへの意欲が高まったという成果を、今後の実践においても大切にしていこうとしていることが分かる。

以上、教師が着目した課題や実践に取り組む上で大切にすることは、「自学・自習」を単元計画の一部に導入し、「子供がする授業」の試错的改善に取り組んだことによると考えることができる。

4-5. 自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかり

T小学校では、「自学・自習」に関する振り返りを行う中で、教師が事前に持っている枠組みを子供が越えることに驚き、子供観の転換が大切であることが話題となった。

また、事前の打ち合わせの重要性も出された。指導書（赤刷り）を参考としながら、45分の見通しを確認するとともに、内容面に関して事前に解決すべき課題を子供と共通理解し、子供だけで解決し授業に臨むようにする。ここまでくると、事前の打ち合わせは時間的には短くなり、最終的には子供だけで授業の準備ができるようになるという教師の声が生まれた。

このような子供観や授業観の転換は、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなると考える。

N小学校では、「自学・自習」を単元計画の一部に導入し、「子供がする授業」の試错的改善に取り組んだことにより、次のような子供の声・教師の声が生まれている。

第一点、「型を消して、どう進めていくかを子供と相談するようになった」。このような授業づくりの姿勢は、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなると考える。

第二点、「あとどのくらいの時間が必要だと自然に声が出て取り組んでいる」、「子供だけで、『今日の授業はどうでしたか』という振り返りまでできるようになった」、「授業中にできない時は少し時間をくださいと言うときもある」、「先生役の子を助けてあげようという様子が見られた」。これは、学習の進度

に対する調整を図っている姿であると言える。そして、このような調整を図る姿勢は、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなると考える。

第三点、「相手意識をもっている」、「教師役をした子供は、友達が話していることの意味図を汲んで『こういうことだよ』と反応していて、優しく受け入れることができるようになった」、「グループ作りの時も『こっちにおいでよ』と自然にやさしく受け入れられる姿が増えた」。これは、子供が互いの求めを確認しながら、互いの求めを大切に授業を適切に進めていこうとする調整が働いている姿であると言える。そして、このような調整を図る姿勢は、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなると考える。

第四点、「先生がやっていたことを自分たちが進めていいというのは嬉しい」、「他の人の話を聞いたり板書したりするのが楽しい」、「授業中にぼんやりしている子が減って、自然にみんな集中しているようになりました」。

これは、子供も教師も、自由進度学習への期待を実感し始めた姿であると言える。このことは、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなると考える。

以上は、「自学・自習」における「子供がする授業」が、自己調整学習・自由進度学習を視野に入れた教育の実現の手がかりとなるということを明示していると考えられる。

5. 今後の課題

N小学校が、「自学・自習（子供がする授業）」に取り組んだのは実質半年間である。実際に「自学・自習」（子供がする授業）」が各教室で行われたのは7・8回から20回程度で、この期間の総授業時数に対して占める割合は多く見積もっても4%である。

それにもかかわらず、子供にも教師にも上

記のような変容が見られている。N小学校では、次年度以降も「自学・自習」を取り入れていく計画である。実施する時数や内容によって、どのような成果と課題が明らかになるのかは継続して研究していきたい。

また、T小学校をはじめ先行して取り組んでいる学校との連携を深めて「子供がする授業」に取り組む意義や価値を協働しながら明らかにしていくことも検討したい。

これまで授業改善については、発問や指示等の指導法をはじめ教師が子供に直接指導をすることに関する研究は為されてきている。

しかしここに来て、これまで以上に子供主体で一人一人が個別最適な学びを実現することを目指した新たな取り組みが各学校で模索されている。とすれば、本研究の「自学・自習」(子供がする授業)」が基盤となり、単元内自由進度学習等、授業時間において教師が必ずしも直接は指導しない授業の在り方や意義・価値、さらにこうした学習に取り組む単元やカリキュラムの作り方の変化、そして一時間の授業がどう変わるのか等の研究に取り組んでいく必要があると考えている。

-
- 1) 中央教育審議会 (2021).「令和の日本型学校教育」の構築を目指して~全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現~ (答申)
 - 2) 深谷達史 (2019).子供 (学習者) の学びと大人 (教師) の学び—わが国の教授・学習・認知研究の動向と展望—、教育心理学研究,58.30-46
 - 3) 天童市立天童中部小学校。筆者は平成30年度から令和3年度まで校長として勤務。
 - 4) 小幡肇・大谷敦司,「令和の日本型学校」の構築をめざす学校への挑戦—天童中部小学校での取り組みを通して—, 教育研究所紀要第32号 (2023)

